



人間文化研究機構地域研究推進事業
「現代インド地域研究」

RINDAS

The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

龍谷大学現代インド研究センター

RINDAS 伝統思想シリーズ 12

「真実」

—梵語合成語 *satya-kriyā* をめぐりて—

原 実



龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・現代インド研究センター
The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

研究テーマ：「現代政治に活きるインド思想の伝統」

The Living Tradition of Indian Philosophy in Contemporary India

現代インドのイメージは、かつての「停滞と貧困のインド」、「悠久のインド」から、「発展するインド」へと様変わりした。激変する経済状況を支えたのは、相対的に安定したインドの「民主主義」政治である。興味深いことに、現代政治・経済を支える人々の行動規範や道徳観の根底には、「民主主義」などと並んで、サティヤ（真実／真理）、ダルマ（道徳性／義務）、アヒンサー（非暴力）など、長い歴史に培われてきたインドの思想やその世界観が横たわっている。

本プロジェクトでは、龍谷大学が創立以来370年に渡って蓄積してきた仏教を中心としたインド思想研究に関する知識と史資料を活かし、近年本学において活発化している現代インド研究を結合させる。「現代政治に活きるインド思想の伝統」というテーマにもとづき、下記のように二つの研究ユニットを設けて現代インド地域研究を推進し、プロジェクト活動を通じて、次世代を担う若手研究者の育成を図っていく。

研究ユニット1 「現代インドの政治経済と思想」

研究ユニット2 「現代インドの社会運動における越境」

RINDAS 伝統思想シリーズ 12

「眞実」

——梵語合成語 *satya-kriyā* をめぐりて——

原　　実

「真実」—梵語合成語 *satya-kriyā* をめぐりて—

原

実

(1) 序論

ここに論ぜんとする *satya-kriyā* の合成語それ自体は、梵語文献には見えず、寧ろそれは *sacca-kriyā* としてパーリ文献に現れる。文字通り邦訳すれば「真理の作用、真実の働き」の義であるが、通常この合成語は「厳肅なる宣言、宣誓」(a solemn declaration, a declaration on oath) 等と翻訳されている。

併しながら、本論に入るに先立って、我々は梵語 *satya* に纏わる、幾つかの問題に、簡単に触れて置かねばならない。

英語の「Truth (真実)」に相当する語として、M. Monier Williams の English Sanskrit Dictionary は、*satya, tathya, rta, samyak, avitathya, tattva, sattva* 等を挙げている。この中で、我々に最も親しいものは、*satya* であるが、それは漢訳仏典では「真、実、諦、誠」等と翻訳されている。

有名な「(四) 聖諦」の原語も *ariya-sacca* であるが、それは単なる抽象名詞の境涯を脱して、それ自体一種の「力」となっている。その点で *satya* は、同じ「真実」を意味している *tattva* や *sattva* 等とは自ずから一線を画している観がある。併しこの問題に今は触れない。¹

のみならず古代インドには「真実の力」に対する一種の信仰の如きものがあった。「真実」を語り、実践する事が「功德」に纏わる一種の「力」と考えられていた如くである。²

併し古くヴェーダ文献では、この「真理」を意味する語としては、*satya* よりも寧ろ、通常「天則」と邦訳される *rta* の語が、一般的であった。それが何時頃から *satya* に取って替られたのか、管見の及ぶ限りでない。

一方 *rta* は、古典サンスクリット語に於いて力を失い、寧ろその否定形 *anrta* (漢訳「非実、虚妄、妄語、虚偽説」) が優勢となり、一般的となった。

古代インドの *satya-kriyā* に就いての研究史に簡単に触れて置く必要がある。今を去る事凡そ一世紀以前にアメリカの学者 E. W. Burlingame が “The Act of Truth (*saccakiriya*): A Hindu Spell and its Employment as a psychic motif in Hindu Fiction” と題する論文を *Journal of the American Oriental Society* に寄稿している。その後、ドイツの碩学 Heinrich Lüders が大著 *Varuṇa* の第一巻において詳細な研究を発表した (Göttingen 1951)。その弟子 Paul Thieme も又この問題に关心を寄せ、“Meaning and form of the ‘grammar’ of *Pāṇini*”と題する論稿を *Studien zur Indologie und Iranistik* 8/9 (1982) pp 1-34 (= *Kleine Schriften*, pp. 1170-1201) に発表

¹ For the *ariya sacca*, cf. K.R. Norman, “The four Noble Truth,” in his *Kleine Schriften*, vol.II, pp.210-223, and “Why are the Four Noble Truths called ‘Noble’?”, vol. IV, pp.171-174.

² For “magische Kraft der Wahrheit,” cf. Thieme, *Kleine Schriften*, pp.1096, 1122, 1126, 1183, 1184, 1187-88; cf. also p.118.

した。近くは又、Renate Söhnen が “On the Concept and Function of *satya* in Ancient Indian Literature” と題して W. Norman Brown の所論を批判しつつ、稿を起した(*International Conference on Sanskrit and Related Studies*, Kracow 1995, pp. 235-244)。本邦に於いても荒牧典俊博士³、若原雄昭博士⁴を初め優れた学者がこの問題を扱っておられるので、筆者は謂わばそれらに「蛇足」を加える事になる事を、予め断って置かねばならない。

この *satya* の語が、もと梵語の動詞 *as-* の現在分詞 *san, sant* (漢訳「有、実、真、善、正、賢」等) に由来して居る事は明らかであるが、それと語尾 *-ya, -tya* との係り合いは審らかでない。

ところで、梵語の *satya* を、そのまま日本語の「真実」に置き換えてよいものであろうか。両者の間には少なからぬ隔たりが存在する。それはしばしば「言う」と言う動詞 *brū-* と連合し（「真実を言う」）、実質的には「嘘を言わない」事を意味していた。

それは又時に「為す」を意味する *kr-*（「真実を行う」）と連合して⁵、「約束を確實に実行する」事を意味して居た。その意味でこの語は邦語の「誠」に類似した面を有している。何故なら、日本語の諺に「誠を行えば、鬼神もこれをさく」と言われる様に、それは実践の対象でもあった故である。

以下に便宜上これを「真実」と邦訳するが、両者の意味内容が、上に示した様に、必ずしも同一でない事を、予め断って置かねばならない。

(2) 「真実語の効用」⁶

(2-1) 以下に先ずパーリ仏典、就中「本生経」(*Jātaka*)に見える用例を整理して提示するであろう。

(2-1-1) 「山火事終息」

「真実語」を語る事により、山火事の火は退散した。

*atthi loke sīla-guṇo, saccam soceyy' anuddayā
tena saccena kāhāmi sacca-kiriyam anuttamam
āvajjitvā dhamma-balān saritvā pubbake jine
saccabalam apassāya saccakiriyam akās' aham
(Vatṭaka-jātaka 35; I.214.9-12)*

³ A Short History of the Word “satya / sacca” in the Post-Vedic Period (2012年7月3日に行われたRINDAS 2012年度第1回伝統思想研究会における講演を指す)。

⁴ 「真実 (satya)」『仏教学研究』50, 1994, pp.38-72; “The Truth-utterance (*satyavacana*) in Mahāyāna Buddhism”『仏教学研究』56, 2002, pp.58-69.

⁵ Thieme, op. cit., p. 1182ff. and Söhnen p. 236ff.

⁶ For the concept of “Wahrheitszauber,” cf. Thieme, op. cit., pp. 930, 1182-5.

世間には戒徳あり、真実あり、清浄に対する心遣いあり。
その真実に由り、我は無上の誓言を為さん。
 法の力を思念し、在りし昔の勝者を憶念して
真実の力を知見し、我は誓言を為せり。⁷

(2-1-2) 「毒消し、再生」

「真実の告白」は、毒蛇に噛まれて死んだ息子を再生させる。「己が義務を遂行する事」は、本心からではなく、唯嫌々ながらしているに過ぎない」と正直に告白する事に於いても、「真実」はその威力を發揮する。

(2-1-2-1) 先ず遊行者の告白。五十年以上遊行生活をしているが、一度も嘗て「遊行生活」に喜びを覚えた事はなかった。

Tāpaso "sādhu sacca-kiriyam karissāmīti" vatvā Yaññadattassa sīse hattham thapetvā paṭhamam gātham āha:

*sattāham evāham pasannacitto
 puññatthiko acariṇ brahmacariyam
 athāparam yam caritaṇ mamā-y-idam
 vassāni paññāsa samādhikāni
 akāmako vā hi aham carāmi
etenā saccena suvatthi hotu
 hataṇ visam jīvatu Yaññadatto
 saha sacca-kiriyāya Yaññadattassa thanappadesato uddham visam bhassitvā paṭhavim pāvisi*
(Kāñhadīpayanajātaka 444 J.iv.31.7-22)

苦行者は「宜う御座います、真言を唱えましょう」と言って、ヤジュニヤダッタの頭に手を置いて、第一偈を唱えた。

七日の間余は心清く、徳を求めて修しぬ梵行を
 更に又余は生きぬ、五十有四年が間。快楽なく遊行して
この真実もて幸あれかし、毒は払われ、ヤジュニヤダッタは生き(返れ)よ。
 (すると) この真実の表白と共に (= 時を同じくして) ヤジュニヤダッタの胸のところから毒が抜け上って、地の中に入った。⁸

(2-1-2-2) 第二に父の告白誓言 「家長の義務として布施を行ってきたが、それは本心からでなく、嫌々ながらして居たに過ぎない」

⁷ Cf. L. Alsdorf, WZKAS 1 p.13 = *Kleine Schriften*, p.282, Wiesbaden 1974.

⁸ Cf. Lüders *Varuṇa* 2.491ff, Alsdorf WZKSOA I (Wien 1957) p.13.

*yasmā dānam n'abhinandim kadāci
disvā nāham atithim vāsa-kāle
na cāpi me appiyataṁ avedum
bahussutā samañabrāhmaṇā ca
akāmako vā hi aham dadāmi
etena saccena suvatthi hotu
hatam visam jīvatu yaññadatto ti*

遊行者をみて宿をもとめに来し時も 余は嘗て喜捨せざりき。

多聞の沙門バラモンは世の不快さを知らざりけり。

快樂なく余は布施す。この真実もて幸あれかし、

毒は払われ、ヤジュニヤダッタは生きよ。

(2-1-2-3) 第三に母の告白誓言 「久しく夫に貞節を尽くして来が、それは本心からではなかった。この毒蛇の様に、私は夫を嫌って居るのだが、致し方なく、好きでもないのにこれまで仕えてきたに過ぎない」

*āśīviso tāta pahūtatejo
yo tam aḍatthi patarā udicca
tasmiñ ca me appiyātāya ajja
pitari ca te n'atthi koci viseso
etena saccena suvatthi hotu
hatam visam jīvatu Yaññadatto ti*

我が子よ、虚力なる毒蛇は（地の）割目、（蟻塚の）穴を上って汝を噛めり。

今日、此奴に於ける我が不快さは、汝の父に於けると差異あらず。

この真実もて幸あれかし、毒は払われヤジュニヤダッタは生きよ。

ここに「母」の「真実語」にも、「率直にして正直な告白」、即ち「懺悔」の意味合いが読取れる。

(2-1-2-4) 「死者蘇生」(自白・懺悔：嫌々ながら義務を為す)

「真実語」は、仏典においてしばしば「蘇生」のモティーフを形成している。J.444 (カンハディーパヴァティー ジャータカ *Kaṇhadīpāyana-jātaka*)と J.34, 75, 216 (マッチャ ジャータカ *Maccha-Jātaka*)、並びに J.540 (サーマ ジャータカ *Sāma-Jātaka*)には「蘇生」のモチーフが見える。

(2-1-2-4-1)

sattāham evāham pasannacitto

puññatthiko acarim brahmacariyam
 athāparam yam caritam mamā-y-idam
 vassāni paññāsa samādhikāni
 akāmako vā hi aham carāmi
etena saccena suvatthi hotu
 hataṁ visam jīvatu Yaññadatto (1)
 yasmā dānam n'abhinandim kadāci
 disvānāham atithim vāsakāle
 na cāpi me appiyataṁ avedum
 bahussuttā samaṇa-brāhmaṇa ca
 akāmako vā hi aham dadāmi
etena saccena suvatthi hotu
 hataṁ visam jīvatu Yaññadatto (2)
 āsīviso tāta pahūtatejo
 yo tam adatthi patarā udicca
 tasmiñ ca me appiyatāya ajja
 pitari ca te n'atthi koci viseso
 etena.... Yaññadatto (3)
 santā dantā yeva paribbajanti
 aññatra Kañhyā nakāmarūpā
 dīpāyana kissa jigucchamāno
 akāmako carasi brahmacariyan (4)
 saddhāya nikkhamma punam nivatto
 so elamūgo va bālo vatāyam
 etassa vādassa jigucchamāno
 akāmako carāmi brahmacariyam
 viññūpasatthañ ca satañ ca thānam
 evam p' aham puññakaro bhavāmi (5)
 samaṇe tuvam brāhmaṇe addhike ca
 santappayāsi annapānena bhikkhum
 opānabhūtaṁ va gharaṁ tavā-y-idam
 annena pānena upetarūpam
 atha kissa vādassa jigucchamāno
 akāmako dānam imam dadāsi (6)
 pitaro ca me āsu pitāmahā ca
 saddhā, ahū dānapaṭī vadaññū
 tam kullavattam anuvattamāno
 māham kule antimagandhino ahum
 etassa vādassa jigucchamāno
 akamako dānam imam dadāmi (7)

*dahariṁ kumāriṁ asamatthapaññam
yan t' ānayiṁ nātikulā sugatte
na vāpi me appiyataṁ avedi
aññatra kāmā paricārayanti
atha kena vanṇena mayā te bhoti
sañvāsadhammo ahu evarūpo (8)
ārā dūre na idha kadāci atthi
paramparā nāma kule imasimīṁ
tam kullavattam anuvattamānā
māham kule atimagandhinī ahūṁ
etassa vādassa jigucchamānā
akāmikā baddha carāmi tuyham (9)
maṇḍavya bhāsissam abhāsaneyyam
tam khamyatam puttahetu majja
puttapemā na idha par'atthi kiñci
so no ayam jīvati Yaññadatto ti (10)*

七日の間、余は心清く、徳を求めて修しぬ梵行を
更に又余は生きぬ 五十有余年が間
快樂なく遊行して、この真実もて幸あれかし。
毒は払われ、祭施は生きよ。(1)
遊行者をみても宿を求めて来た時も、余は嘗て喜捨せざりき。
多聞の沙門 バラモンは余の不快さを知らざりけり。
快樂なく余は布施す。この真実もて幸あれかし。
毒は払われ、祭施は生きよ。(2)
我が子よ、強力なる毒蛇は、地の割目、蟻塚の穴を上がって汝を噛めり。
今日こいつに於ける我が不快は、汝の父に於けると差異あらず....(3)
清淨にして自制の者は、出家す。カンハは他に不快なる姿ぞなし。
ディーパーヤナよ、何ぞ苦行を嫌惡して、梵行を修する、快樂なく(4)
信じて出家し、又帰る。聾や馬鹿の如く、げに汝は、この言葉にて嫌いつつ、
余は梵行を修す、快樂なく。聖人に褒められ、家はよし。
されば余もならむ、善行者に。(5)
沙門、バラモン、遊行者に、汝は供養す、飲食もて、
汝が此の家は如意堂の如、飲食もて具備すれば、
如何なる言で、嫌いつつ、この布施を為す、快樂なく。(6)
我が父、祖父は正信で、施主にして又慈悲ありき。
家庭の義務を守る余を、我が家の屑となしめざれ。
此の言葉にて嫌いつつ、余は布施を為す、快樂なく。(7)
知能未熟の若き娘を、我は連れ来ぬ、親族より、美女よ、
余に愛無きを知らしめず、恋慕無くして近侍する、貴女よ、

汝は何すれぞ、斯く共存する余と共に。(8)
 久しき以来よもあらず、此の家で二夫にまみえんとは
 家庭の義務を守る妾を、我が家の脣とならしめざれ、
 この言葉にて嫌いつつ、御身と暮らす、快樂なく。(9)
 マンダヴィヤ、妾は述べぬ、不可語をば、我が子の為に許されよ
 子供の愛に優るなし、我等の子なる祭施は生く。(10)

J.444 は、明らかに「懺悔告白」「罪の自白」の類である。即ちここに在家者は「嫌々ながら、布施の義務を行い」、貞女は「嫌々ながら、夫に仕える」と言って、九人の人々は夫々の立場で「真実語」を述べる。すると死んだ息子 Yaññadatta は蘇生したと言われる。

(2-1-2-4-2) 同じ「蘇生」のモチーフは、Sāma-jātaka (540)に現れて、そこでは叙事詩『ラマーヤナ』と類似句を共有している。

*ath' assa mātā bahum vilapitvā ure hattham thapetvā santāpam upadhārentī "puttassa me
 santāpo pavattat' eva, visa-vegena visaññitam āpanno bhavissati, nibbisa-bhāvatthāya c' assa
saccakiriyam karissāmīti cintetvā saccakiriyam akāsi.
 tam attham̄ pakāsento satthā āha
 disvā patitam sāmam puttakam̄ pañsukuññhitam
 atṭitā putta-sokena mātā saccam abhāsatha
yena saccen' ayam sāmo dhamma-cārī pure ahu
etenā sacca-vajjena visam sāmassa haññatu (87)
yena saccen' ayam sāmo brahmacārī pure ahu (88)
yena saccen' ayam sāmo sacca-vādī pure ahu (89)
 mātā-petti-bharo ahu (90)
 kule jeññhāpacāyiko
etenā sacce-vajjena visam sāmassa haññatu (91)
yena saccen' ayam sāmo pāññā piyatara mama
etenā sacca-vajjena visam sāmassa haññatu (92)
 yan kiñc' atthi katañ puññam̄ mayhañ c' eva pitu-cca te
 sabbena tena kusalena visam sāmassa haññatū ti (Sāma-jātaka 540.93)*

この事を説明して佛は言われた。
 倒れて塵土に塗れたる、その子サーマを打ち見やり、
 胸痛むなるこの母は、子を歎きてぞ、誓言を述ぶ。
この真なるにより.....このサーマ、前に法行行ぜりと、
この真実の言により、サーマの毒は滅せむ事を。(87)
この真なるにより.....このサーマ、前に梵行行ぜりと、
この真実の言により、サーマの毒は滅せむ事を。(88)
 前に真実語る者なりしと.....(89)

彼が父母を扶養せりと、(90)
族の上長敬えりと.....(91)
生きとし物の我が最愛と.....(92)
我と父との行いし、如何なる福も全てみな
全て善なりしそれにより、サーマの毒は滅せむ事を。(93)

(2-1-3) 「治病」

貞女の真実語は、夫の「らい病」をも治癒した。

*Sā tassa vacanam sutvā "ayya-putta aham tam asaddahantam mama sacca-balen' eva
tikicchissāmīti" udakalasam pūretvā sacca-kiriyam katvā tassa sīse udakam āsiñcantī
tathā mam saccam pāletu pālayissati ce mamañ
yathāham nābhijānāmi aññam piyataram tayā
etenā sacca-vajena vyādhi te vūpasammatū 'ti (Sambulā-jātaka 519; J.5.94-95)*

彼女は彼の言葉を聞き、「いとしき夫よ、私を信じて下さらないとしても、私は真実の力で（貴方の）病気を直して進ぜましょう」と言って水の壺を充たして、真実の誓を為し、彼の頭に水を注ぎつつ（言った）。

「この真実、若し妾の（夫を）護るべくば、
隨ひて妾をも護れかし。
妾は他に汝に優る愛人あるを知らずと
この真実語によりて、汝の病癒えよ」。（立花俊道訳）

(2-1-4) 「海難脱出」

難破船の中で怯える船員に対して、菩薩は真実語によって、無事に急場を脱した。

*Mahāsatto ubhohi hatthehi puñña-pātiñ gahetvā nāvāya dhure thito sacca-kiriyam karonto
osāna-gātham āha
yato sarāmi attānam yato patto 'smi viññutam
nābhijānāmi samcicca ekapāñam pi hiñsitam
tena sacca-vajena sotthim nāvā nivattatū ti (Suppāraka-jātaka 462: J.4.142 10-15)*

摩訶薩は両手を以て、盛られた鉢を取り、船の先端に立ち、願立をして最後の偈を唱えた。

「自ら記憶し得る限り、物ごころついて以来、
我は一生物なりとも、これを故意に害したるを知らず。
この真実語によりて船は安全に帰還せよ」。

(2-1-5) 「真実語」は又大乗經典「法華經」にも現れる。

*teśām purataḥ satyādhīsthānam karomi yena satyena satyavacanena svam mama bāhum
tathāgata-pūjā-karmaṇo parityajya suvarṇa-varṇo me kāyo bhaviṣyati tena satyena
satya-vacanenāyam mama bāhur yathā paurāṇo bhavavisiṣyat ayam ca mahā-prthivī
śad-vikāram prakampatv antarikṣa-gatāś ca deva-putrā mahā-puspa-varṣam pravarṣantu /
atha khalu nakṣatra-rāja-saṃkusumitābhijñā samanantarakṛte 'smin satyādhīsthāne tena
sarvasattva-priya-darśanena bodhisattvena mahāsattvena, atha khalv iyam
trisāhasra-mahāsāhasrī loka-dhātuḥ śaḍvikāram prakampitā, uparyantarikṣāc ca
mahāpuspa-varṣam abhipravarṣitam /*

(*Saddharma-puṇḍarīka 22. Bhaisajya-rāja-pūrva-yoga-parivarta p.413, line 7-p.414, line 2*)

「彼等の前で真実の誓いをするのです。この真実によって、この真実の言葉によって、私が如来への供養のために、自分の腕を捨てた時、私の身体は黄金色となるであります。この真実の言葉によって、私の腕はもとの様になれ。そして大地は六通りに震動せよ。空中にいる天子らは花の大雨を降らせ」

するとこの真実の誓いをするや否や、三千大千世界は六通りに震動し、そらから花の大雨が降って來た。

(岩本裕訳)

(2-1-6) 「真実語」は又「大事」(*Mahā-vastu*)にも現れる。

*r̥ṣi āha / satya-vākyena etā badhyanti na śaknonti antarahāyitum / mādhuryena ca r̥ṣinā
asamanvāharitvā r̥ju-bhāvena ācakṣitam na jānāti kinnariye etasya artho ti (Mahā-vastu
2.97.9-11)*

仙人は言った。彼等は真実語により縛られて、姿を消す事が出来なかった。

人の良い仙人は、全てを思わず言ってしまった。そして彼は獵師が、キンナラ女の後をつけている事を疑わなかった。

*dhītā tvam kinnara-rājasya drumarājño yaśasvino
etena satya-vākyena tiṣṭha baddhāsi kinnari
yathā tvam drumarājasya dhītā drumeṇa rājñā samvrddhā
satya-vacanena bhadre mahohare mā padam gaccha*

汝は令名高きキンナラ王、ドルマの娘なり。

この真実語により、キンナラの王女たる汝は、縛られた儘に留まる。

汝はキンナラ王ドルマの娘で、ドルマ王によって育てられた。

目出度くも、魅力的なる女よ、真実語により汝は一歩も動く能わず。

ここに我々は、「真実語」が一種の拘束力を具えて居た事を知る。

(2-2) 仏典を離れ、次に梵語文献、特に叙事詩『マハーバーラタ』に現れる「真実語」の用例を検討するであろう。

(2-2-1) 叙事詩に於いて「真実語」の陳述はしばしば「*svaireṣv api* (冗談にも)」の定型句を伴う。尚、この定型句を伴わない用例は後に(2-2-7)で一括して論ずる。

(2-2-1-1) 「真実の効用」 = 「死児の蘇生」(パリクシットの蘇生)

*nokta-pūrvam mayā mithyā svaireṣv api kadā cana
na ca yuddhe parāvṛttas tathā sanjīvatām ayam (19)
yathā me dayito dharmo brāhmaṇāś ca viśeṣataḥ
abhimanyoḥ suto jāto mr̥to jīvatv ayam tathā (20)
yathāhaṁ nābhijānāmi vijayena kadācana
virodham tena satyena mr̥to jīvatv ayam śiśuh (21)
yathā satyam ca dharmaś ca mayi nityam pratiṣṭhitau
tathā mr̥taḥ śiśur ayam jīvatām abhimanyujah (22)
yathā kaṁsaś ca keśī ca dharmeṇa nihatau mayā
tena satyena bālo 'yam punar ujjivatām iha (23)
ity ukto vāsudevena sa bālo bharatarṣabha
śanaiḥ śanair mahārāja prāspandata sacetanaḥ (MBh.14.68.24)*

「余は、冗談にも嘗て虚言を吐いた事はない。

又戦場にて、敵に背を向けた事もない。されば此の子は蘇生せよ。(19)

余は、人倫の道とバラモン達を特に愛している。

アビマニユの息子は、死せるも、直ちに蘇生せよ。(20)

余は戦いに一度も敗れた事はない。

この真実に賭けて(*tena satyena*)、死したるも、此の子は蘇生せよ。(21)

真実と人倫の道とは、常に余に於いて確立してあり。

されば、死すとも、これなるアビマニユの息子は蘇生せよ。(22)

カンサとケーシンの両人を、余は法に従って殺したり。

この真実により、これなる小児は今直ぐ立ち上がり」(23)

ヴァスデーヴァが斯く言うと、この小児は

次第に意識を取り戻して、動き出した。(24)

(2-2-1-2) その他の用例

息子の *Śrṅgin* は、父 *Śamīka* に向って言う。但し、ここでは *satya* の替りに *mr̥ṣā vāc* の否定形となっている。

*śrīngy uvāca
yady etat sāhasam tāta yadi vā duṣkṛtam kṛtan
priyam vāpriyam vā te vāg uktā na mrsā mayā (1)
naivānathedam bhavitā pitare eṣa bravīmi te
nāham mrsā pravṛavīmi svairesv api kutah śapan (MBh.1.38.2)*

父上よ、私が無謀な事をしようと、悪い事をしようと、
又それが父上の気に入るにせよ、入らぬにせよ、私が言った言葉は虚言にはなりません。

父上、それは決して変えようがありません。誓って申します。
私はふざけて居る時でも、嘘は申しません。況や（真剣に）呪っている時は尚更です。

*sūta uvāca
evam uktas tathety uktvā so 'stīko mātaram tadā
abравād duḥkha-saṃtaptam vāsukim jīvayann iva (17)
aham tvā mokṣayisyāmi vāsuke panngottama
taṃśāc chāpān mahā-sattva satyam etad bravīmi te (18)
bhava svastha-manā nāga na hi te vidyate bhayam
prayatiṣye tathā saumya yathā śreyo bhaviṣyati
na me vāg anrtam prāha svairesv api kuto 'nyathā (MBh.1.49.19)*

吟遊詩人曰く。
斯く言われたアースティカーは「判りました」と母に答えてから、
苦惱するヴァースキを蘇生させるかの様に、次の様に言った。(17)
「竜王ヴァースキよ、私はあの呪詛から貴方を解放しましょう。
偉大なる存在よ、私はその様に誓います。(18)
安心して下さい。貴方に危険はありません。
伯父さん、幸せが来る様に努力致します。
私はふざけて居る時も虚言を語りません。況やこの様な重大な時は尚更です」(19)

*dharma-śīlā janapadāḥ susamtośāś ca sādhavah
na ca mithyā-pralāpo 'tra svairesv api kuto 'nyathā (MBh.1.57.10)*

そこの国民は敬虔で、非常に満足し、善人であり、
ふざけて居る時も嘘をつかない。況やそうでない時は猶更である。（上村勝彦訳）

*evam etat saubaleyi naitaj jātv anyathā bhavet
vitatham nokta-pūrvam me svairesv api kuto 'nyathā (MBh.1.107.17)*

ガンダーリーよ、告げた通りになるであろう。決して別様にはならない。

私はふざけて居る時も、嘗て嘘を言った事がない。況や他の場合に於いてをや。(上村勝彦訳)

*madhu-kaiṭabhāv ūcatuḥ
anṛtam nokta-pūrvam nau svairesv api kuto 'nyathā
satye dharme ca niratau viddhāvām puruṣottama (MBh.3.194.23)*

マドウとカイタバの兩人は言った。

「冗談にも、我等両人が嘘を吐いた事はない。況や他の場合に於いてをや。
我等兩人は真実と法(正義)を愛す。男の中の男よ。

*nāham mithyā-vaco brūyām svairesv api kuto 'nyathā
bhavato yad ahaṁ brūyām tat kāryam aviśāṅkayā (MBh.13.51.17)*

余は虚言を吐かざるべし、冗談にも。況や他の場合に於いてをや。
余がこれから貴君に言う事を、躊躇なく実行せよ。

*satyam te pratijānāmi nātra mithyāsti kiṁ cana
anṛtam nokta-pūrvam me svairesv api kuto 'nyathā (MBh.14.56.10)*

余は汝に真実を誓う。そこに間違いは全くない。
余は冗談にも虚言を言った事なし。況や他の場合に於いてをや。
苦しむ竜王を励まして彼女は言う。

*svairesv api na tenāham smarāmi vitatham kva cit
ukta-pūrvam kuto rājan sāmparāye sa vakṣyati (MBh.1.44.11)*

ふざけて居る時も、彼は嘗て偽りを言ったという記憶はありません。
況やこの重大な時期に、どうして彼が嘘を言うでしょうか。(上村勝彦訳)

但しこの定型句は、今一つの叙事詩『ラーマーヤナ』には嘗て現れない。この事実は二つの叙事詩の成立過程、その背景に相違ある事を指示しているもの如くである。

ドリタラーシュトラ王は言う。

*yasya nityam rtā vācaḥ svairesv api mahātmanah
trailokyam api tasya syād yoddhā yasya dhananjayaḥ (MBh.3.46.5)*

ふざけて居る時でも、常に真実な言葉を語る、
かの偉大なるアルジュナは、将来きっと、三界を手に入れるであろう。

貞女ダマヤンティーはナラ王を評して言う。

*na smarāmy anṛtam kim cin na smarāmy anupākṛtam
na ca paryuṣitam vākyam svairesv api mahātmanah (MBh.3.71.13)*

あの偉大な人が、不誠実であったり、害を為したり、
ふざけて居る時も、間抜けな事を言ったりした事を憶えていない。（上村勝彦訳）

当然天国に居ると思った弟アルジュナが地に落ちたのを見て、ビーマは言う。

*anṛtam na smarāmy asya svairesv api mahātmanah
atha kasya vikāro 'yam yenāyaṁ patito bhuvi (MBh.17.2.20)*

私はこの偉大なる男が、冗談にも嘘を言ったのを憶えて居ない。
それなのに、彼が地上に落ちたのは、一体如何なる理由に由るのか。

「真実語」の表出は、「虚言(*anṛtam vacah*)を吐かぬ事」と裏腹である。
先ず貞女サーヴィトリーの夜半、森の中の祈りの中に次の様な章句が見える。

*yadi me 'sti tapas taptam yadi dattam hutam yadi
śvaśrūśaśurabhartṛṇām mama puṇyās tu śarvarī (96)
na smarāmy ukta-pūrvām vai svairesv apy anṛtām giram
tena satyena tāv adya dhriyetām śaśurau mama (MBh.3.281.97)*

若し私が苦行を行じ、布施を為し、供物を捧げた事が真実なら、
この夜が舅と姑と夫にとって無事に過ぎます様に。
私は寛いだ時も、不真実の言葉を述べた憶えがない。
その真実に賭けて、私の舅達が今日、生きならえます様に。

*ṛcīka uvāca
nokta-pūrvam mayā bhadre svairesv apy anṛtam vacah
kim utāgnim samādhāya mantravac caru-sādhane (MBh.12.49.24)*

リティーカはサティヤヴァティーに誓って言う。
「芽出度き女よ、冗談にも余は嘗て、虚言を吐いた覚えはない。
況や、チャルを用意する為に、特別な呪文を以て火を灯す場合に於いてをや」

(2-2-2) 「真実とは何ぞや」

次に梵語文献に於いて、*satya* がどの様に考えられて居たであろうか。

(2-2-2-1) 「三義務の一」 (+ Veda, 沐浴)

*dhāraṇam sarva-vedānāṁ sarva-tīrthāvagāhanam
satyam ca bruvato nityam samaṁ vā syān na vā samam (MBh.13.74.28)*

一切のヴェーダを保持する事、一切の沐浴場で沐浴する事
常に真実を語る事。この三者は互いに等しいか、等しくないかである。(同じ位)

(2-2-2-2) 「四徳の一」 (+ 布施, 不殺生, 愛語)

*dāne ratatvam satyam ca ahimsā priyam eva ca
eṣāṁ kārya-garīyastvād dr̥syate guru-lāghavam (4)
kasmāc cid dāna-yogād dhi satyam eva viśiṣyate
satya-vākyāc ca rājendra kiṁ cid dānaṁ viśiṣyate (5)
evam eva mahesvāsa priya-vākyān mahī-pate
ahimsā dr̥syate guruvī tataś ca priyam iṣyate (6)
evam etad bhaved rājan kāryāpekṣam anantaram
yad abhipretam anyat te brūhi yāvad bravīmy aham (MBh.3.178.7)*

布施に励む事、真実、不殺生、優しい言葉、
これらは結果の重要度に応じて、夫々の軽重が決まる。
と言うのは、或る場合には布施よりも真実が優れている。王中の王よ、
又真実語よりも、或る場合には布施が優れている。
同様に偉大なる戦士である王よ、不殺生が優しい言葉よりも
優れている事もあれば、優しい言葉が優れて居る事もある。
この様に直接的に結果によるのである。
他に聞きたい事があったら言いなさい。私は答えるであろう。(上村勝彦訳)

(2-2-2-3) 「五ダルマの一」 (+ 不殺生、不盜、清浄、感官抑制)

*ahimsā satyam asteyam śaucam indriya-nigrahah
etam sāmāsikam dharmam cātura-varṇye 'bravīn manuh (MS.10.63)*

不殺生、真実、不偷盜、清浄、感官抑制
かいつまんで言えば、これらが四身分に共通の正しい生き方であるとマヌは言った。

(2-2-2-4) 「十ヤマの一」

*brahmacaryam dayā kṣāntir dānam satyam akalkatā
ahimsā steya-maddhurye damaś ceti yamāḥ smṛtāḥ (312)*

*snānam manunopavāsejyās svādhyāyopastha-nigrahāḥ
niyamā guru-śuśrūṣā śaucākrodhāpramādatā (YS.3.313)*

梵行、憐憫、忍耐、瞑想、真実、正直、不殺生、不偷盜をしない事、無惡意、自制、以上はヤマと言われる。
沐浴、沈黙、断食、供儀、性欲の抑制、長上奉仕、清浄、怒らない事、施しを喜びとする者である事、以上はニヤマと言われる。

(2-2-3) 「真実こそは最高也」

これら諸法の中でも、就中「真実」は最高のものであると言われるが、先ずそれは古来インドの宗教の最重要概念であった「祭祀」にも優るものと言われた。

(2-2-3-1) 「真実は祭祀に優る」 (*satyam evātiricyate*)

*aśvamedha-sahasram ca satyam ca tulayā dhṛtam
aśvamedha-sahasrād dhi satyam eva viśisyate (MBh.1.69.22)
aśvamedha-sahasram ca satyam ca tulayā dhṛtam
aśvamedha-sahasrād dhi satyam evātiricyate (MBh.12.156.26)*

千の馬祀と真実を、秤に掛けて見たら、千の馬祀よりも、真実の方が重かった。

(2-2-3-2) 「四徳の軽重」（結果に由る）

本文は先にも掲載したが、便宜上ここに繰り返して引用する。

*dāne ratatvam satyam ca ahīṁsā priyam eva ca
eṣāṁ kārya-garīyastvād dṛśyate guru-lāghavam (4)
kasmatc cid dāna-yogād dhi satyam eva viśisyate
satyavākyāc ca rājendra kiṁ cid dānam viśisyate (5)
evam eva maheśvāsa priya-vākyān mahī-pate
ahīṁsā dṛśyate gurvī tataś ca priyam iṣyate (6)
evam etad bhaved rājan kāryāpekṣam anantaram
yad abhipretam anyat te brūhi yāvad bravīmy aham (MBh.3.178,7)*

布施、真実、不殺生、愛語の中で、結果の軽重により、軽重が決まる。或る場合には布施よりも真実が優れる。

又或る場合には、真実より布施が優れる。
同様にして、愛語よりも不殺生が重いと見られ、
又不殺生よりも愛語が優れると見做される場合もある。
斯くの如く、結果に依って、優劣が決まる。

(2-2-3-3) 「真実称揚」

aśvamedha-sahasram ca satyam ca tulayā dhṛtam
aśvamedha-sahasrād dhi satyam eva viśsyate (29)
satyena sūryas tapati satyenāgnih pradīpyate
satyena māruto vāti sarvam satye pratiṣṭhitam (30)
satyena devān prīnāti pitṛn vai brāhmaṇāms tathā
satyam āhuh param dharmām tasmāt satyam na laṅghayet (31)
munayah satya-niratā munayah satya-vikramāḥ
munayah satya-śāpāś tasmāt satyam viśisyate
satyavantah svargaloke modante bharatarṣabha (32)
damah satyaphalāvāptir uktā sarvātmā mayā
asamāśayam vinītātmā sarvah svarge mahīyate (33)
brahmacaryasya tu guṇāñ śṛṇu me vasudhādhipa
ā janmamaraṇād yas tu brahmacārī bhaved iha
na tasya kiṃcid aprāyam iti viddhi janādhipa (34)
bahvyah koṭyas tv ḥṣīnām tu brahma-loke vasanty uta
satye ratānām satataṁ dāntānām ūrdhvaretasām (MBh.13.74.35)

千回の馬祀と真実を秤にかけると、真実の方が重かった。(29)
真実によって太陽は熱し、真実によって火は燃え、
真実によって風は吹く。一切は真実に根付く。(30)
真実によって人は神々、祖先、バラモンを喜ばす。
真実こそ最高のものなれば、真実を犯す勿れ。(31)
牟尼達は真実を専らとし、真実なる (=空しからざる) 勇気、
真実なる呪詛を有す。されば真実は優れている。
真実を有すれば、天界において楽しむ。(32)
余は、心を籠めて敢えて言う。抑制は真実の果報達成也と。
疑いもなく、克己者は、凡て天界において崇められる。(33)
梵行者の徳を、我より聞け。この世に於いては生れてから死ぬ迄、梵行者たれ。
彼には、何一つ到達不可能なものは存在しない。(34)
常に真実を旨とし、自制心あり、禁欲を旨とする
牟尼達の多くは、梵界に住している。(35)

この世の一切、森羅万象、天体の進行に至るまで、凡ては真実に基づいて居ると言われ

る。

(2-2-3-4) 「一切は真実に基づく」 (*sarvam satye pratiṣṭhitam*)

便宜上、上の章句を再度引用する。

*aśvamedha-sahasrayam ca satyam ca tulayā dhṛtam
aśvamedhasahasrād dhi satyam eva viśisyate (MBh.13.74.29)
satyena sūryas tapati satyenāgnih pradīpyate
satyena māruto vāti sarvam satye pratiṣṭhitam (MBh.13.74.30)*

千回の馬祀と真実を秤に掛ければ
千回の馬祀よりも真実が優れている。
真実に由って太陽は登り、真実によって火は輝く。
真実に由って風は吹く。一切は真実に根付いている。

さらに、以下の用例がある。

*na yajñādhyayane dānam niyamās tārayantī hi
tathā satyam pare loke yathā vai puruṣarśabha (61)
tapāṁsi yāni cīrṇāni cariṣyasi ca yat tapah
samāh śataiḥ sahasraiś ca tat satyān na viśisyate (62)
satyam ekākṣaram brahma satyam ekākṣaram tapah
satyam ekākṣaro yajñah satyam ekākṣaram śrutam (63)
satyam veḍeṣu jāgarti phalam satye param smṛtam
satyād dharmo damaś caiva sarvam satye pratiṣṭhitam (MBh.12.192.64)*

祭式もヴェーダの学習も、布施も、勤行も、
来世に於いて、真実程には人々を救わない。
汝の為したる苦行も、将来為さんとする苦行も、
百回為すとも、千回為すとも、(それは) 真実には及ばない。
真実は梵と同義(*eka-akṣara*)、真実は苦行と同義、
真実は祭式と同義、ヴェーダの伝承とも同義。
真実はヴェーダの中に覚醒してあり、真実の果報は絶大。
人倫の道も、将又、自己抑制も真実より出づ。一切は真実に基づく。

*satyasya vacanam sādhu na satyād vidyate param
satyena vidhṛtam sarvam sarvam satye pratiṣṭhitam (MBh.12.251.10)*

真実を語る事は善なり。真実より優れたるものなし。

一切は真実に由り保持される。一切は真実に基づく。

(2-2-4) 「真実と生命」

「真実を守る事」と「生命を守る事」の中、何れが尊いかの問題は、一概には答えられない。何故ならば、時に「真実」は「生命」より重いと言われ、又時に「生命」は「真実」より重いと言われている故である。但し時に satya は anṛta vācyā となって現われる。

(2-2-4-1) 「生命は真実より重い」

「生命保持の為ならば、嘘をついても構わない」

*prāṇa-trāṇe 'nṛtam vācyam ātmano vā parasya vā
gurv-arthe strīṣu caiva syād vivāha-karaṇe (MBh.12.35.25)*

自身、或いは他人の生命を救う為ならば、嘘をついても構ねない。
長上の為にも。又結婚の為ならば、女に対して嘘をついても構わない。⁹

(2-2-4-2) 「真実は生命より重い」

satyam evābhijānīmo nānṛte kurmahe manah
svadharma anutīṣṭhāmas tasmān mṛtyu-bhayaṁ na nah (MBh.3.182.17)

我々は真実のみ認識なす。不真実に心を置かない。
己が義務のみ遂行す。されば我等に死の恐怖なし。¹⁰

(2-2-5) 「特殊合成語」

satya-nitya

*akrodhanā dharma-parāḥ satyanityā dame ratāḥ
tādrśāḥ sādhavo viprās tebhyo dattam mahā-phalam (MBh.13.23.33)*

⁹ 又「掛け替えのない命を守る事」の大切を説いて次の如く言われる。

*uttama-vyasanārtena prāṇa-trāṇam abhīpsnā
mayaitad astraṁ utsṛṣṭam bhīmasena-bhayān mune (MBh.10.15.13)*

最高の苦難に悩まされ、命を守りたいと思った余は、
ビーマセーナへの怖れから、この武器を捨てた。

¹⁰ Cf. also Kane vol.2, 1627, 1648 (ここで *satya* は *dharma* と並び称せられる), 1420-21(ここで *satya* は「方便」と言われる), vol.5 1256.

怒らず、人倫の道を貴しと為し、常に真実を語り、自制心に富む。
この様な立派なバラモン達に布施為せば、大なる果報あり。

*devi dharmārtha-tattva-jñē satya-nitye dame rate
sarva-prāṇi-hitah praśnah śrūyatām buddhivardhanah (MBh.13.132.4)*

妃よ、人倫の道と利害の本義を知り、常に真実を語り、進んで自制しつつ、一切生類の為になり、知力を増進する問い合わせが、聞かるべきである。

*satya-nityah kṣamā-nityo jñāna-nityo 'tithi-priyah
yo dadāti satāṁ nityam sa māṁ prcchatu pāṇḍavah (9)
ijyādhyayana-nityaśa dharme ca nirataḥ sadā
śāntah śrutarahasyaś ca sa māṁ prcchatu pāṇḍavah (MBh.12.55.10)*

常に真実を語り、忍耐心あり、知識を求め、客人に親切で、常に善人達に布施する人、彼が余に質問せよ。
常に祭式、称名を好み、常に人倫の道に励み、寂靜にして、秘儀を聞くのを好む人が、余に質問せよ。¹¹

(2-2-6) 「真実語(*satya-vacana, satya-kriyā*)への信仰」

「嘘を言わない」と言う事は、唯單に「道徳的徳目」であるに留まらず、それは「宗教的神秘力」を具えて居た。

(2-2-6-1) 「神々をも動かす」

satya-kriyā のモチーフの中で、最も有名なものは「ナラ王物語」に見える「貞女ダマヤンティー」のそれである。彼女はこの「真実の力」によって神々を動かし、所期の愛人ナラ王を見出す事が出来た。

*sā viniścītya bahudhā vicārya ca punah punah
śaraṇam prati devānāṁ prāptakālam amanyata (15)
vācā ca manasā caiva namaskāram prayujya sā
devebhyah prāñjalir bhūtvā vepamānedam abravīt (16)
haṁsānāṁ vacanāṁ śrutvā yathā me naiḍhadho vṛtaḥ
patitve tena satyena devās tam pradiśantu me (17)
vācā ca manasā caiva yathā nābhicarāmy aham
tena satyena vibuddhās tam eva pradiśantu me (18)*

¹¹ For the word *nitya*, cf. M.Hara, “A Note on the Sanskrit Word *nitya*,” in JAOS, vol.79 (1959) pp.90-96.

*yathā devaiḥ sa me bhartā vihito niṣadhādhipaḥ
tena satyena me devās tam eva pradiśantu me (19)
svaṁ caiva rūpaṁ puṣyantu lokapālāḥ saheśvarāḥ
yathāham abhijāṇyām puṇya-ślokaṁ narādhipam (20)
niśamya damayantyās tat karuṇāṁ paridevitam
niścayaṁ paramaṁ tathyam anurāgaṁ ca naiṣadhe (21)
mano-viṣuddhim buddhim ca bhaktim rāgaṁ ca bhārata
yathoktaṁ cakrire devāḥ sāmarthyam liṅga-dhāraṇe (22)
sāpaśyat vibudhān sarvān asvedān stamba-locaṇān
hrṣita-srag-rajo-hīnān sthitān asprśataḥ kṣitīm (23)
chāyā-dvitīyo mlāna-srag-rajaḥ-sveda-samanvitāḥ
bhūmi-ṣṭha naiṣadhaś caiva nimeṣeṇa ca sūcītāḥ (24)
sā samīkṣya tato devān puṇya-ślokaṁ ca bhārata
naiṣadhaṁ varayām āsa bhaimī dharmeṇa bhārata (MBh.3.54.25)*

彼女は何度も決定しては何度も思い迷って、神々に救いを求めるべき時が来たと考えた。(15)

彼女は言葉と心で神々に敬礼して、合掌し、震えながら言った。(16)

「ハンサの言葉を聞いて（以来）私はニシャダ国王を夫に選びました。

その真実に賭けて、神々は私に彼を指し示して下さい。(17)

私は言葉と心により、不実ではありません。

その真実に賭けて、神々は私に彼を指し示して下さい。(18)

神々によりあのニシャダ王は私の夫と定められました。

その真実にかけて、神々は私に彼を指し示して下さい。(19)

そして、偉大なる主である世界守護神達は、御自身の姿を現して下さい。

私がブニヤシュローカ王を見分けられる様に。」(20)

ダマヤンティーの悲しい嘆声を聞くと、

又彼女の最高の決意、ニシャダ国王に対する真実の愛、(21)

心の清らかさ、知性、献身、情念を知ると、

神々は言われた様に、全力を尽くしてその特徴を披露した。(22)

彼女は神々が全て、汗をかかず、瞬きをせず、新鮮な花輪を付け、

埃がつかず、地上に触れないで立つてゐるのを見出した。(23)

そしてニシャダ国王が、影を伴い、しおれた花輪を付け、埃と汗を伴い、

瞬きをして地上に立つてゐるのが認められた。(24)

かくてビーマの娘は神々とブニヤシュローカを見分ける事が出来、

ダルマに則つてニシャダ国王を選んだ。(25)（上村勝彦訳）

(2-2-6-2) 同類の物語は仏典にも現れる。但しここでは男女が逆転して、男性が多数の女性の中から、特定の女を選び出す事となっている。

キンナラ王は、愛娘にそっくりな姿をした、千人のキンナリーを立たせ、スダナ王子にこの中らから、愛娘一人を選び出す様に命じた。そこで王子は「真実語に賭けて」言う。

*yathā drumasya duhitā mameha tvam manoharā
śīghram etena satyena padam vraja manohare
tataḥ sā druta-padam abhikrāntā (Divyāvadāna 459)*

汝、ドルマ（王）の娘は、我が愛しのマノーハラーなり。
この真実に賭けて、直ちにマノーハラーよ、一歩前進せよ。
すると彼女は急ぎ一歩前へ出た。

(2-2-6-3) 「奇蹟発生」

sa āha / prajñapayārya-duhitas tv asya bhaktam api tu satya-vacanam tāvat kariṣyāmi / yenārya-duhitah satyena satya-vacanenāyam evam-rūpa āścaryādbhuto dharmo na kadā cid drsto vā śruto vā tena satyena satya-vacanena ubhau tava stanau yathā paurāṇau prāduri-bhavetām / saha-kṛtenāsmiṇ evam-rūpe satya-vacane tasyā asminn eva kṣaṇe ubhau stanau yathā paurāṇau prāduri-bhūtau (Divyāvadāna 32 p.472. 23-29)

彼は言った。「お前、(私の乳房は)、彼女の食物となったと(人に)仰って下さい」と言つたな。では私は真実語を為そう。お前、真実や真実語によつて、何時でも稀有、未曾有法を見聞出来る訳ではないが、この真実により、真実語により、お前の両の乳房が元通りになる様に」。彼がこの様な真実語を為した。(まさに) その瞬間、以前と同じ両の乳房が彼女に現れ出たのである。(平岡聰訳)

(2-2-6-4) 「性転換物語」

sāha / na me ubhau stanau parityajantyā abhūc cittasya vīpratisārah/śakra āha/atra kah śradhāsyati/rūpavaty āha / tena hi brāhmaṇa satya-vacanam kariṣyāmi / yena satyena brahman satya-vacanenobhau stanau parityajyāmīti parityajya vā nābhūc cittasyānyathātvam nābhūc cittasya vīpratisāro 'pi ca brahman yena satyena mayā dārakasyārthāyobhau stanau parityaktau na rājyārthaṁ na bhogārtham na svargārthaṁ na śakrārthaṁ na rājñāṁ cakravartināṁ viṣayārthaṁ nānyatrāham anuttarāṁ samyak-saṁbodhim abhisambudhyādāntān damayeyam amuktān mocayeyam anāśvastān āśvāsayeyam aparinirvṛtān parinirvāpayeyam tena satyena satya-vacanena mama strīndriyam antardhāya puruṣendriyan prādurbhavet / tasyās tasminn eva kṣaṇe atrīndriyam antarhitam puruṣendriyan prāduri-bhūtam / atha khalu śakro devendras tuṣṭa udagrāttamanāḥ pramuditāḥ prīti-saumanasya jātaḥ / tata eva rddhyā vaihāyasam atyudgamyodānam udānayati rūpavatyāḥ strīndriyam antarhitam puruṣendriyan prādurbhūtam / rūpāvatyāḥ striyah rūpāvataḥ kumāra iti samjñā utpāditā (Divyāvadāna p.473 line 17-p.474 line 6)

彼女は言った。「いいえ、両の乳房を喜捨する私の心に後悔の念はありませんでした。そんな事を誰が信じるものか」とシャクラ（帝釈天）が言うと、ルーパヴァティーは答えて言った。

「ではそれなら、バラモンよ、私は真実語を為しましょう。乳房を喜捨する時も、してから後も、私の心に動搖はなく、心に後悔の念もありませんでした」というこの真実に賭けて、

私が男子の為に乳房を喜捨したのは、王位、財産、天界、帝釈天。転輪王の国土の為ではなく、無上正等菩提を正等覚した後、無覚を悟らしめ、安穏ならざるを安穏ならしめ、涅槃して居ない者を涅槃に至らしめんとする。この真実により、真実語により、私の女陰は消失し、男根が現れます様に。

この瞬間に彼女の女陰は消失し、男根が現れ出了。帝釈天は満足し、歓喜した。彼はそこから、神通力で上空に舞い上がり、「ルーパヴァティーの女陰は消失し、男根が現れ出了」と歓声を挙げた。彼女はルーパヴァト童子と命名された。

(2-2-7) 「真実の効用」 (*tena satyena*)

先に我々は *svaireśvapi* の定型句を伴う用例をみたが (2-2-1)、以下にそれ以外の用例を検討するであろう。「真実語の効用」に対する信仰は、叙事詩に親しいモチーフとなっているが、それはしばしば *tena satyena* の定型句を伴う。尚、今一つの叙事詩『ラーマーヤナ』にはこの定型句 (*tena satyena*) は三度現れる。

(2-2-7-1) 『ラーマーヤナ』

(2-2-7-1-1) 「名王の治世」

名君ダシヤラタの治世を謳つて、次の如く言われる。

*tena satyābhīsamdhena trivargam anuastaṣṭhatā
pālitā sā purī śreṣṭhā indreṇevāmarāvatī* (R.1.6.5)

この都(の人々)は、真実の遂行に専念し、人生三大目標の達成に努力するこの王によって守られていた。恰もアマラーヴァティー城が帝釈天によって守られて居る様に

(2-2-7-1-2) 孝行息子の父は十車王を呪いながら、息子に向って言う。

*apāpo 'si yathā putra nihataḥ pāpa-karmanā
tena satyena gacchāśu ye lokāḥ śastra-yodhinām* (R.2.58.34)

何んよ、そなたは悪党によって殺されたのだから、罪はない。

その真実を誇りとして、そなたは武器を持って戦う者達の世界に速やかに赴け。

(2-2-7-1-3) ラーヴァナに捕まった貞女ランヴァーは、岳父に対して次の様に言う。

*yathā tasya hi nānyasya bhāvo māṁ prati tiṣṭhati
tena satyena māṁ rājan moktum arhasy arimdama (R.7.26.27)*

他人ならいざ知らず、彼（ヴィヴィーシャナ）の私に対する気持ちは(この様で) 変わらない。

この真実に賭けて、王よ、どうか私を解放して下さい。

(2-2-7-2) 『マハーバーラタ』

(2-2-7-2-1) 「戦勝」

「息子」の戦勝を実現する。尚、「自分」自身の「戦勝」(必殺の誓い)は別に論じる(2-2-7-2-3-5)。

*na sma kleśatamam me syāt putraih saha paramtapa
duryodhanena nikṛtā varṣam adya caturdaśam (58)
duḥkhhād api sukhām na syād yadi puṇyaphalakṣayāḥ
na me višeṣo jātv āśīd dhārtarāṣṭreṣu pāṇḍavaiḥ (59)
tena satyena krṣṇa tvāṁ hatāmitram śriyā vṛtam
asmād vimuktam samgrāmāt paśyeyam pāṇḍavaiḥ saha
naiva śakyāḥ parājetum sattvam hy eśām tathā-gatam (MBh.5.88.60)*

敵を苦しめる者よ、私と息子達にとって、ドウルヨーダナに辱められた程、辛い事はない。今や十四年になる。(58)
若し苦しみから幸福が生じないなら、功徳や果報がない事になってしまう。
私は決してドリタラーシュトラの息子達に対し、
パーンダヴァ達と差別した事はありませんでした。(59)
クリシュナよ、この真実に賭けて(tena satyena)、私は貴方がパーンダヴァ達と共に敵を殺し、繁栄に囲まれこの戦争を無事に切抜けるのを見たいものです。彼等は決して敗れる筈はない。彼等の勇気はある様であるから。(60) (上村勝彦訳)

(2-2-7-2-2) 「天界獲得」

(2-2-7-2-2-1) 自ら天界を得る

yathā mama priyatarāś tvatto viprāḥ kurūdvaha

tena satyena gaccheyam lokān yatra sa śamtanuh (MBh.13.8.13)

余によりて、汝以上に愛しい者は居ない。バラモン達とクルの後裔よ。
この真実に賭けて(tena satyena)、余はシャンタヌの居る世界に赴かんとしている。

*bravīmi satyam etac ca yathāham pāṇḍu-nandana
tena satyena gaccheyam lokān yatra sa śamtanuh (MBh.13.58.38)*

パーンズの息子よ、余はこの真実を語る。
この真実に賭けて(tena satyena)、余はシャンタヌの居る世界に赴かんとしている。

(2-2-7-2-2-2) 他人をして天界に登らしめる。

*śivir auśināro dhīmān uvāca madhurāṁ giram
yathā bāleṣu nārīṣu vaihāryeṣu tathaiva ca (8)
saṃgareṣu nipāteṣu tathāpad-vyasaneṣu ca
anṛtam nokta-pūrvam me tena satyena khaṁ vraja (9)
yathā prāṇāṁś ca rājyam ca rājan karma sukhāni ca
tyajeyam na punah satyam tena satyena khaṁ vraja (10)
yathā satyena sa dharmo yathā satyena pāvakaḥ
prītaḥ śakraś ca satyena tena satyena khaṁ vraja (11)
aṣṭakas tv atha rājarṣih kauśiko mādhvī-sutah
anekaśatayajvānam vacanām prāha dharma-vit (12)
śatasāḥ puṇḍarīkā me gosavāś ca citā prabho
kratavo vājapeyāś ca teṣāṁ phalam avāpnūhi (13)
na me ratnāni na dhanām na tathānye paricchadāḥ
krātuṣv anupayuktāni tena satyena khaṁ vraja (MBh.5.120.14)*

聰明なるウシーナラの息子シビは甘美な言葉を述べた。

「私は子供や女性に対しても、ふざけている時も、(8)
戦闘に於いても、落ち込んでいる時も、緊急時や、災禍の時も、
未だ嘗て虚偽を言った事はない。(anṛtam nokta-pūrvam)

この真実に賭けて(tena satyena)、貴方は天界へ行きなさい。(9)

王よ、私は生命、王国、仕事、幸福を

捨てるとも、真実は捨てはしない。

この真実に賭けて(tena satyena)、貴方は天界へ行きなさい。(10)

私の真実により、ダルマ神、火神、インドラは満足した。

この真実に賭けて(tena satyena)、貴方は天界へ行きなさい。」(11)

すると法を知る王仙アシタカ、つまりカウシカの息子、マーダヴィーの息子は、
幾百の祭祀を主催したヤヤーティに言った。(12)

「王よ、私は百というブンダリーカとゴーサヴァを積み重ねた。
 ヴァージャペーヤ祭をも行った。それらの果報を得なさい。(13)
 私が祭祀に於いて用いなかった宝物、財産、その他の備品はない。
その真実に賭けて(*tena satyena*)、貴方は天界に行きなさい。」(14)

(2-2-7-2-3) 「守護」

(2-2-7-2-3-1) 貞女を誘惑者の危険から守る。

ステーシュナーの命令で、キーチャカの許に遣わされたドラウパディーは太陽神に祈つて言う。

*yathāham anyam pāndubhyo nābhijānāmi kam̄ cana
 tena satyena mām prāptām kīcako mā vaśe kṛthāḥ (MBh.4.14.18)*

私はパーンドゥの息子達以外の、如何なる男をも知らない。
この真実に賭けて、キーチャカがやって来た私を自由にする事がないように。

(2-2-7-2-3-2) 貞女が夫とその一家を救う。(Sāvitry-upākhyāna)

貞女サーヴィトリーは夫サティヤヴァトを励まして言う。

*evam uktvā sa dharmātmā guru-vartī guru-priyah
 ucchritya bāhū duḥkhārtah sasvaram praruroha (94)
 tato 'bravīt tathā dṛṣṭvā bhartāraṇ śoka-karśitam
 pramṛjyāśrūṇi netrābhyām sāvitrī dharmacāriṇī (95)
 yadi me 'sti tapas taptaṇi yadi dattām hutām yadi
 śvaśrū-śvaśurabhartrnām mama puṇyās tu śarvarī (96)
 na smarāmy ukta-pūrvām vai svairesv apy anṛtām giram
 tena satyena tāvad ya dhriyetām śvaśurau mama (MBh.3.281.97)*

親に従順で、親思いの、徳性ある彼は、この様に言うと、
 両腕を上げて、悲嘆に暮れ、声を上げて泣いた。(94)
 法を実践するサーヴィトリーは、その様に悲嘆に暮れて居る夫を見て
 両眼から涙を拭って言った。(95)

「若し私が苦行を行じ、布施をし、供物を捧げた事が真実なら、
 この夜が姑と舅と夫にとって無事に過ぎますように。(96)
 私は寬いでいる時も、不真実の言葉を述べた憶えがない。
その真実に賭けて、私の舅達が今日、生き永らえますように。」(97)

ここに、苦行、布施、祭紀はヒンドゥ教の三大徳目である。

(2-2-7-2-3-3) 「呪殺」

淋しい森の中で、貞女を誘惑しようとする獵師に向って、ダマヤンティーは真実語を語って彼を呪い殺す。但しここでは真実語 (tena satyena) の替りに *yathā* に導かれる章句が現れる。

*damayanī tutam duṣṭam upalabhyā pati-vratā
tīvra-roṣasamāviṣṭā prajajvāleva manyunā (34)
sa tu pāpa-matiḥ kṣudraḥ pradharṣayitum āturaḥ
durdharṣāṇī tarkayām āsa dīptām agni-śikhām iva (35)
damayanī tu duḥkhārtā pati-rājya-vinākṛtā
atīta-vāk-pathe kāle śāśāpainam ruṣā kila (36)
yāthāham naiṣadhād anyam manasāpi na cintaye
tathāyam patatām kṣudraḥ parāsur mṛga-jīvanaḥ (37)
ukta-mātre tu vacane tayā sa mṛga-jīvanaḥ
vyasuḥ papāta medinyām agni-dagdha iva drumaḥ (MBh.3.60.38)*

貞節なダマヤンティーは彼が悪い男だと知り、
激しい怒りに駆られ、憤怒で燃える様になった。(34)
悪い考えを起こした卑しい男は、暴行したいと、うずいたが、
彼女は犯し難く、燃える炎の様であると考えた。(35)
ところがダマヤンティーは夫と王国を失って悲嘆に暮れ、
口で制する事の出来る時が過ぎた時、怒ってその男を呪った。(36)
「私がニシャダ国王以外の男を心によってすら考えた事がないように、
この卑しい獵師が命を失って倒れる様に」。(37)
彼女がそう告げるや否や、その獵師は生命を失って、
火に焼かれた樹の様に大地に倒れた。(38)

(2-2-7-2-3-4) 「死者蘇生」

先に我々は *Jātaka* に於ける「死者蘇生」の物語を見たが、同じモティーフは叙事詩にも現われる。

*nokta-pūrvam mayā mithyā svairesv api kadā cana
na ca yuddhe parāvṛttas tathā samjīvatām ayam (19)
yathā me dayito dharmo brāhmaṇāś ca viśeṣataḥ
abhimanyoḥ suto jāto mṛto jīvatv ayam tathā (20)
yathāham nābhijānāmi vijayena kadā cana*

virodham tena satyena mṛto jīvatv ayaṁ śiśuḥ (21)
yathā satyam ca dharmaś ca mayi nityam pratiṣṭhitau
tathā mṛtaḥ śuśur ayaṁ jīvatām abhimanyu-jah (22)
yathā kamsaś ca keśī ca dharmeṇa nihatau mayā
tena satyena bālo 'yam punar ujjīvatām iha (23)
ity ukto vāsudevena sa bālo bharatarṣabha
śanaiḥ śanair mahārāja prāspandata sacetanah (MBh.14.68.24)

「余は、仮令冗談にも、これまで嘘を言った事がない。
 又、戦場で背を向けた事がない。されば、この子は生き返れ。(19)
 余は正義を愛す。又バラモン達を特に尊崇する。
 されば、死産で生れて来た、これなるアビマニユの息子は、蘇生せよ。(20)
 余は嘗てヴィジャヤと意見を異にした事はない。この眞実に賭けて、この子は蘇生せ
 よ。(21)
眞実(satyam)と正義(dharma)は常に余の中に存立す。
 さればこれなる死産の子、アビマニユの息子は蘇生せよ。(22)
 カンサとケーシンを余は正義に基づき、殺害せり。
この眞実に賭けて(tena satyena)、この子はこの場で蘇生せよ。」(23)
 斯くヴァスデーヴアが言った途端、
 彼は意識を取り戻し、少しづつ動き出した。(24)

(2-2-7-2-3-5) 「必殺の誓い」

yathā hi yātvā samgrāme na jīje vijayāmi ca
tena satyena samgrāme hatam viddhi jayadratham (53)
dhruvam vai brāhmaṇe satyam dhruvā sādhuṣu samnatih
śrīr dhruvā cāpi dakṣeṣu dhruvo nārāyane jayah (MBh.7.53.54)

私は戦場に行ったら、(絶対に) 敗けられない。必ず勝利する。
その眞実に賭けて、ジャヤドラタが既に戦場で殺されたと思え。
 バラモンに眞実は確実である。善き人々に謙虚さは確実である。
 有能さに於いて繁栄は確実である。ナーラーヤナに於いて勝利は確実である。(上村勝
 彦訳)

(2-2-8) 「余はこれを眞実なるものとして言う」 (*satyam etad bravīmi te*)

今一つ、叙事詩には *satyam etad bravīmi te* と言う「定型句」が繰り返される。

sūta uvāca
evam uktas tathety uktvā so 'stīko mātaram tadā

abravīd duḥkhasamptaptam vāsukim jīvayann iva (17)
ahaṁ tvā mokṣayiṣyāmi vāsuke pannagottama
tasmāc chāpan mahāsattva satyam etad bravīmi te (18)
bhava svastha-manā nāga na hi te vidyate bhayam
prayatisye tathā saumya yathā śreyo bhaviṣyati
na me vāg anṛtam prāha svaiरेष्व api kuto 'nyathā (MBh.1.49.19)

スータは言った。

そう言われたアースティカは「判りました」と母に答えてから、

苦悩するヴァースキを蘇生させるかの様に言った。(17)

「竜王ヴァースキよ、私はあの呪詛から貴方を解放しましょう。

偉大なる存在よ、私はそう誓います。(18)

龍よ、安心して下さい。貴方には危険はありません。

伯父さん、幸せが来るよう努力致します。

私はふざけている時も、不眞実を語りません。

況やこの様な重大な時には尚更です。(19)

シャクンタラーは、結婚申し込みをする王に条件を突き出して、次の如く言う。

yadi dharma-pathas tv esa yadi cātmā prabhur mama
pradāne pajravaśreṣṭha śrṇu me samayaṁ prabho (15)
satyam me pratijānīhi yat tvāṁ vakṣyāmy ahaṁ rahaḥ
mama jāyeta yaḥ putraḥ sa bhavet tvad anantaram (16)
yuva-rājo mahā-rāja satyam etad bravīhi me
yad etad evaṁ duḥṣanta astu me saṃgamas tvayā (17)
vaiśampāyana uvāca
evam astv iti tāṁ rājā pratyuvācāvicārayan
api ca tvāṁ nayiṣyāmi nagaram svam śucismite
yathā tvam arhā suśroṇi satyam etad bravīmi te (18)
evam uktvā sa rājarṣis tāṁ anindita-gāminīm
jagrāha vidhivat pāṇāv uvāsa ca tayā saha (MBh.1.67.19)

「若しそれが法に叶い、又若し私が自由であるなら、
パウラヴァの王様、私を与えるに就いて条件がありますから聞いて下さい。(15)

私が貴方に秘かに申し上げる事を、守る事をお約束下さい。

私から生れる息子が、貴方の後継の皇太子になります様に。(16)

大王様、この約束を守ると仰って下さい。若しそうして頂ければ、

私は貴方と交わりましょう。」(17)

ヴァイシャンपーヤナは言った。

「王は躊躇する事なく、「承知した」と彼女に答えた。

美しく微笑む女よ、そして私は貴女を我が都に連れて行くであろう。

美しい尻の女よ、貴女はそれに相応しいから。私は貴女にこの事を誓う。(18)

王仙はそう言って、魅力的に歩く彼女を規定に

従って娶った。そして彼女と共に時を過ごした」(19)

弓箭の師ドローナは、愛弟子アルジュナに、次の如く約束を籠めて誓う。

*prayatisye tathā kartum yathā nānyo dhanurdharaḥ
tvat-samo bhavitā loke satyam etad bravīmi te (MBh.I.123.6)*

この世に、汝に等しき弓箭の士は、今後この世に現れ出づる事無き様、
余は努めん。余はこの真実を（約束して）汝に告ぐ。

愛に絆された羅刹女は、ビーマに告白して次の如く言う。

*sāham tvām abhisamprekṣya deva-garba-samaprabham
nānyam bhartāram icchāmi satyam etad bravīmi te (23)
etad vijñāya dharmajñā yuktaṁ mayi samācara
kāmopahā-cittāngīṁ bhajamānāṁ bhajasva mām (MBh.I.139.24)*

私はここで今、神の子の様な貴方を見て、

もう他の男を夫としたくはありません。私はそれを真実として言う（=その様に誓います）。

法を知る人よ、この事を知られたら、私に相応しく振舞って下さい。

私は身も心も、愛に支配されています。私を愛して下さい。（上村勝彦訳）

森の中でダマヤンティーは、最愛のナラ王に向って次の様に言う。

*na ca bhāryā-samaṁ kiṁ-cid vidyate bhiṣajāṁ matam
auśadhaṁ sarva-duḥkhesu satyam etad bravīmi te (MBh.3.58.27)*

「あらゆる苦悩に於いて、妻に等しい薬は何もない」と医師達は説きます。

私はこの事を真実として、貴方に敢えて申し上げます。

(2-2-9) 「誓い、覚悟」

死神をも克服した、敬虔なる「家長期」の男の物語に於いて、次の様に語られる。

*prāṇā hi mama dārāś ca yac cānyad vidyate vasu
atithibhyo mayā deyam iti me vratam āhitam (70)
niḥsamāḍigdham mayā vākyam etat te samudāhṛtam*

tenāham vipra satyena svam ātmānam ālabhe (71)
pr̥thivī vāyur ākāśam āpo jyotiṣ ca pañcamam
buddhir ātmā manah kālo diśaś caiva guṇā daśa (72)
nityam ete hi paśyanti deśinām deha-saṃśritāḥ
sukṛtam duṣkr̥tam cāpi karma dharma-bhṛtām vara (73)
yathaiśā nānṛtā vāṇī mayādya samudāhṛtā
tena satyena mām devāḥ pālayantu dahantu vā (74)
tato nādaḥ samabhavad dikṣu sarvāsu bhārata
asakṛt satyam ity eva naitan mithyeti sarvaśah (MBh.13.2.75)

我が命、我が妻、その他有るもの一切を、
 余は客人に与えん。これ余の誓いなり。(70)
 我が口にしたる、この言葉に疑い有るべからず。
この真理に賭けて、バラモン殿、余は己が命を棄ててもよい。(71)
 「地水火風空の五大、覚、我、意、時、方位と十の属性、(72)
 蓋し、これらは人間の身体に拠って、人々の善業、悪業を見統わし給う。(73)
 余が今ここに述べたる言辞は偽りに非ず。
この真実に賭けて、神々よ、汝等は余を守るも、焼くも致し給え。」(74)
 すると、一切方処に声が起つた。「こは實に真実なり、虚偽に非ず」(75)¹²

(2-2-10) 呪詛

叙事詩を離れても、同様なモチーフは繰り返される。有名なバーナの詩的小説「カーダンバリー」に於いて、貞女が己の純愛に賭けて「真実語」を語り、以て誘惑者を次生にオウムに転生せしめる。

yadi mayā devasya puṇḍarīkasya darśanāt prabhṛti manasāparah pumān na cintitatas
tadānenā me satyavacanenāyam alīkakāmī mad-udīritāyām eva jātau patatu" iti Kādamvarī
p.530 9-10: cf. Lüders 499)

若し私がブンダリーカ様を見て以来、心にも他の男を考えた事がないなら、この真実語によって、これなる卑しい嘘つきは、我が口にする再生に墮ちよ。

(3) 結語

以上我々は satya の語を satya-kriyā との関連に於いて見て來たが、これによって知られる様に satya という梵語名詞は一方に於いて邦語の「真実」とは些か趣を異にする意味内容を擁していたのみならず、又他面それは tattva や sattva とも異って独自の拡がりを有していた

¹² 尚、古典インドに於ける「目撃者=証人」に就いては嘗て論じる機会があった。M. Hara, "Divine Witness," *Journal of Indian Philosophy* 37 (Dordrecht 2009) pp.253-272.

ものの如くである。

終り

Abbreviations

- J. : *Jātaka* (PTS. edition by V. Fausbøll)
- JAOS. : Journal of the American Oriental Society (Baltimore)
- Kane : P.V.Kane, History of *Dharmaśāstra* I-V (Poona 1968)
- MBh. : The *Mahābhārata* edited by V. S. Sukthankar (Poona Critical Edition)
- MS. : The *Manusmṛti* (The Nirnaya Sāgar Press, Bombay 1947)
- R. : The *Vālmīki Rāmāyaṇa* edited by J. H. Bhatt and others (Baroda Critical Edition)
- WZKAS : Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philologie (Wien)
- YS. : The *Yājñavalkyasmṛti* (The Nirnaya Sāgar Press, Bombay 1949)

RINDAS伝統思想シリーズは、人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）<http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/index.html>

NIHU プログラム現代インド地域研究（INDAS）<http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

龍谷大学現代インド研究センター（RINDAS）<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

RINDAS 伝統思想シリーズ 12

「真実」

—梵語合成語 *satya-kriyā* をめぐりて—

原 実

2013年6月28日発行 非売品

発行 龍谷大学現代インド研究センター

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

龍谷大学白亜館4階

TEL：075-343-3813 FAX：075-343-3810

<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

印刷 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麁屋町東入石不動之町677-2

TEL：075-343-0006

ISBN 978-4-904945-29-2

ISBN 978-4-904945-29-2